

東日本大震災後の岩沼市における借り上げ住宅利用者の生活再建過程 The life reconstruction process of the requisition housing user in Iwanuma-City after an East Japan Great Earthquake

水田恵三

Keizo Mizuta¹¹ 尚綱学院大学 総合人間科学部

Comprehensive Human Sciences Shokei Gakuin University

It can't be decided uniformly how social resources are utilized at the place with the strong relation of the area like Iwanuma-City, but there is aid from the family and a relative early relatively, and I can think use takes over in the unfounded case when I enter temporary housing forcibly, and forms. When the family as well as that were sick, a possibility that I move to a requisition is strong. But, even though it was changed to take over in case of Iwanuma-shi, social independence isn't also an earlier reason.

I wouldn't always right group move, but that there were a lot of people who took over and moved to a rehabilitation public housing from housing compared with an other area can think administration and an approach to the area were effective.

Keywords :East Japan Great Earthquake requisition housing social resources

(目的)

東日本大震災後の東日本においてプレハブ仮設の他に民間賃貸住宅を仮設とする「借り上げ住宅」の仕組みが本格的に行われた。立木(2014)はJSTのコミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造」研究開発領域「借り上げ仮設住宅被災者の生活再建支援方策の体系化」(平成26年から28年)研究開発プロジェクトを行っている。これは名取市が主なフィールドであるが、その研究の一環として、名取市に隣接する岩沼市を比較対象として選定した。

岩沼市は2011年の東日本大震災では市域面の約48%が津波による浸水を受け、181人の方がなくなり、住居被害も5428戸を数えた。



図1 岩沼市の津波による浸水状況
浸水地域は左下図の肌色の箇所であるが、沿岸部6集落は大きな被害を受けたが、西側は住居も

多く、市役所、ビックアリーナなどの大きな施設、警察署、消防署、病院などの施設も無事であった。

本研究では、玉浦地区に集団移転して一躍有名になった岩沼地区で被災者世帯の半数とされる借り上げ住民がどのような生活再建を成し遂げたかを分析し、名取市との比較対象とする。

(方法)

調査は、まず、借り上げ住民へのインタビュー調査を行ったが、数が少なく、不明な点も多いので、「東日本大震災 あの時岩沼では」国井出版に記載されている事例を分析し、借り上げ住宅利用者の生活再建過程を分析した。

事例の分析方法は復興の教科書に従って時系列に10時間、100時間、10000時間(1から2ヶ月)に区切って、コーディングした。

このケースは、地区の町内会長が、借り上げに入居したものの、復興住宅に集団移転したケースである。面接場所はプレハブ仮設集会所。

一事例ではケースが不足するので、公刊されている事例から17ケースを分析の対象とした。

(事例の概要)事例の方が話した内容の一部

うん、あのね、その時はね、ちょうど私と家内とね、スポーツのクラブに入ってたね、午前中運動してきたんですね、家帰ってお昼食べて、お昼寝してたので、ああそろそろもう起きないといけないっていうことで、その時に地震あって、帰ってきたのも、あの、12時まわってね、もうお昼食べるのは1時ごろだったからね、でも1時間ちょっとは昼寝してたんだね。でちょうどね、起きて市役所に行く用事があったなって思って出かけよ

うかなって思った時に地震がきたのね。で、私の場合は町内会長っていうことで、それからあの、そういう災害というか地震とかあった場合に、地震の場合は震度5になったらとにかくあの、役員の方が集会所によりましようということで。自主防災組織っていうのを作っていたんだけどね、それで出かけようかなって思ったのね。その前にもう消防団員がちょっと消防団員の一人がね、農作業をずっとしている、専業農家だから、あの、その作業小屋で仕事してたっけね、ラジオ聞きながらしてたんですね。携帯ラジオね。それでその津波情報聞いたってすぐ私のところに飛んできて、大きな津波くるから避難だっていうことで、そこからもう集会所に集まることもしないで、いやもうすぐ広報やって、で、私はみなあの。第一避難所があこの仙台空港ビルだったから、私はもう彼らの指示もあったしね、「私はそこに行ってるから」っていうことで、で、皆来たらまずここに集めておいてって、で、私行ったときにもう何人かいましたからね。で、どんどんどん来るし、空港は混雑してたし、あぁ一か所に集めておいてよかったなってね、私言ってからやっぱりそうだね、約一時間ぐらいあとだったからね、津波がきたのがね、とにかく結構早く行ったんだけど、でも、まあほとんどあの、550名ぐらいかな、そこに来たのがね。で、あとほら、平日だから仕事してない人居るからね、でもまあぼつぼつきて本当にギリギリに来た人いたし、あとやっぱり戻って、なにか取りに戻って、ダメだった人も、だからさっき言ったように寝たきりの人がいて。まあ自分は俺はいいからって、息子と二人で住んでたんだけど、先に避難しろって行ったんだけどやっぱり置いていけなかったんだよね。で、ちょうど消防団員の人って、その話聞いた話だよ、見てないから分からないけど。あの人、だから多分あの、消防車で回っていったから消防団だったのかな、で、何人かでこう、車に乗っけるまでしたのかな。

あのね、そこ空港にね、4泊、空港に6泊5日ですかね、それでその、空港があこの、震災復旧の拠点空港になったんで、とにかくもう次の日あたりかな、二日目あたりからあの、米軍のそのなんていうの、トレーラーだか持ってきて、空港の滑走路すぐ使えるようになったから、そして今度その人たちの寝るところないんですね。それにあとほかの作業員来ましたので、我々もいる場所がなくなっちゃったんで、ということであの、市内の旅館があつて、ちょうどあぁいう時期震災がなければあの、今まで泊まりたくもなかったんで、ちょうど5日目から電気がついたということで、そこについて、移動してそこ五日目から九日間そこに、あそこってよかったです。あの、空港にいる時とにかく寒かった。寒かった。で、ここであの、寒か

ったんでインフルエンザ、かかったんだよね。その旅館にいて間もなくもう発症したんだね。

私はちょっと手前で収まったけど15人ぐらい。高齢者が多かったけどね、それからあの話進めてその人たちを隔離して、でもそこに行ったら暖房はあったから、あったかかったからよかったけどね。うんとね、私たちはね、空港にいるときは、いるときもそうなんだけど食べ物飲み物、あの空港にも備蓄あったし、それから売店に会ったのみんな出してくれたんだ。○の月とか、みんな聞いたと思うんだけど、その点よかったと思いますよ。でもね、やっぱり日本人だね。ご飯食べたくてね。後から聞いたんですけど、内陸の人たちが本当に、防火クラブの人たちがボランティアいたらしいんだけど炊き出ししておにぎり作って、で、初めて、普段のおにぎりあんまりおいしくないんだけどおいしかったんですよ。でも一個ぐらいしかあたらなかった、あれはおいしかった本当に。みんなパンとか飽きてましたから、でも後から話聞いたら握る方も大変だったらしいんですね。もうあの、避難所全部に出さなきゃないから。最初小学校で小学校が体育館別々にしてたんで中学校に移ったんだけど、そこからあとの市民会館と体育館にね。

だからさっきのあのホテルなんだけど、旅館、そこも9日いたんだけど今度その、作業員がやっぱりどんどんどん来たんで、作業員の泊まる場所がないんですよ。だからあけなくちゃなかった、ということでどこか泊まる場所ないかって言ったらそこが開いてたってことで、改良センターの多目的ホール。

それでね、あの旅館の時からですね、集落の息子がその、会社に働いてて、その会社からね、トラックでいろんなの送って来てくれたんですよ。うちのあの、コンロからね、肉やらなにやら火いるもの、で、まあホテルではガスを使えないんでね、鍋はホテルから貸してもらってね。旅館でね。貸すからってということで、じゃあみんなでつくろうということでね、料理人の方が先頭になってやってもらって、一人じゃできないからみんなの手伝ってね、できるように、

改善センターには4月30日まで、ここも早くできたからね、29日からもう引っ越していいよっていう話を聞いたんで、29日、30と、そういう人で2日ぐらい、5月の2日ぐらいで全部あの、移動して、あそこの避難所も閉鎖しましたから。

住まいはあの、北の方にあの、北中学校あるじゃん、北中、あそこのちょっと西側でね、えーとその、アサノスーパー、あそこのね、本通りから30メートルぐらいは行ったところに東西に、南北に道路が、それを北の方に入って、100メートルぐらいのところまでいところがそこに、だからお前も出

てわってね、あの、貸部屋あるんで、空いたから、どうだって、ということでもう、一か月ぐらい前から話し合ってたね、そこでもう頼んでおいたんですわ。まあ色々リフォームとかしてもらって。

皆さんと離ればなれになって寂しいじゃなくて、やっぱり、あの、長になってたものだからじっとしてられなくて、やっぱりここにきてあーだこーだどうだこうだって、で、まあ区長さんここにきたからね、区長さんにはおんぶだったんだけど、まああとから「なんで会長さんここに住まないの」って言われたけど、やっぱりね、区長さんがいてもらって助かったんだけどやっぱり誰か纏める人居ないとだめですね、それはつくづく感じたんだけどでもね、こればかりは。頭ではちょっと、仮設がどうのこうのっていうの頭で考えてなかったからまず自分の住むところってばっかりしか考えてなかったから、うん、まあでも、ね、あの、全部で四十何世帯かな、ここ（仮設）に入ったのね、ここでまとまってもらってるからいいなって思ってたね。で、あとここだとほら、支援が直接来るでしょ、市のほうもあるし、そのサポートもあるし。だから、でも、まあ二人だけだから何とかなったしね、ここにもやっぱり来てもらったもんね支援ね、今度あの、一番困ったのは。困ったっていうか心配だったのは、あの、ばらばらになってまあ。大体あの、改善センターった時はね、100人ぐらいいましたから、あと皆親戚とか自分で探したとかって言っててね、こちんまりになったし。で、今度それがね、区長さんよく調べてくれたなって思ってた。だれがどこに行ったか分からないわけ。区長さん、調べて回ってね。俺も助かったんだわ。

(以上事例の概要)

事例を時系列的に記述すると

昼寝していた→地震が来た→津波が来ることを知る→指定避難所へ（10時間）→市内の旅館→指定避難所へ（100時間）→仮設は考えられず→奥さんと一緒→区長にはお世話になった→しょっちゅう仮設へ（10000時間）

このインタビューの他にも話題に出てきた区長などにも話を聞いたが、結局のところなぜ仮設を選択したのかははっきりとは分からなかった。しかし、10000時間以内に仮設住宅や仮設住宅住民と頻りに接したことが集団移転先の復興住宅への移住につながったと考えられる。

(行政職員へのインタビュー調査)

プレハブ仮設の住民に対しては、月一回のミーティングに参加し、お話を伺っていたが、そ

こに借り上げ住宅住民がほとんど参加されていなかったため、お話を伺うことはできなかった。借り上げ住宅や住民の生活再建に携わっている職員にお話を伺った。

地震当初被災した1500世帯のうち、半数ほどが借り上げ住宅利用者であった。直後は借り上げのシステムがあったのではなく、被災世帯に3万円ほどの補助をするシステムを利用して、アパートを借りており、借り上げのシステムが整って制度を利用するようになった。したがって、当初アパートを借りた人は行政の方の表現を借りれば「恵まれた人たち」であった。しかし、プレハブ利用者が「恵まれていない人たち」ばかりではない。自治会長や行政区長の中には、恵まれていても、集団をまとめるためにプレハブに入った方も多くいた。

地震当初705世帯あった岩沼市内の借り上げ利用者は、2016年5月末現在83世帯になっている。内訳は岩沼市の他にも県南の方もいるが、福島県からが54世帯ともっとも多い。

一方岩沼市民で市外に行った方は、108世帯から10世帯へと減少している。

借り上げ住宅利用後、行政が行ったことは、訪問活動、サロン活動（月一回ほど）などがあった。また先の事例の行政区長は、地区の借り上げ利用者を調べて、定期的に連絡をしていた。今後も訪問活動や、サロン活動は継続していくという。

以上のような継続的な努力もあって、借り上げ住宅から、集団移転先への移住者も他地域に比べて多いことの理由になっていると考えられる。

(他事例の調査)

一事例では借り上げ利用の理由が分からず、さらに取り上げた事例が特殊であった可能性もあるため、公刊されている「東日本大震災 あの時岩沼では」図書から事例を取り上げた。ここに取り上げられている事例は、ご自身が書かれた手記に基づいている。

調べた項目は、被災前の住居地区、性別、年齢、家族の有無、津波の直接体験、身近な人の死亡の有無、など記載内容から調べた。

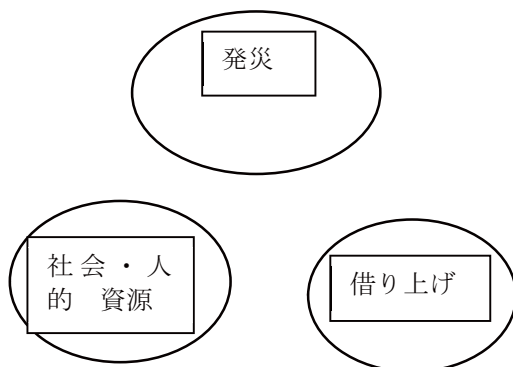
表1にはその結果が示されている。

1、2、17が借り上げ利用者である。

表 1 文献の事例からの調査結果

番号	地区	岩沼 性別	100時間以内 最初の避難場所	1000時間以内 次の避難場所	親戚等の援助
1	林	女	自宅→市民会館	店の大家さん宅	あり
2	相の釜	男	空港→旅館	娘のアパート	
3	林	女	自宅→避難所	仮設	
4	二の倉	男	避難所	仮設	
5	相の釜	男			
6	相の釜	男	自宅→仙台空港	嫁の実家	
7	早股	女	子供の事務所	自宅	
8	寺島	男	集団生活→避難所	仮設	
9	寺島	男	避難所	仮設	
10	長谷釜	女	避難所	仮設	
11	矢野目	女	道路(車)		
12	二の倉	女	親戚宅		親戚からの援助
13	二の倉	男	実家	仮設住宅	
14	長谷釜	女	避難所	仮設住宅	
15	長谷釜	男	集会所→病院		
16	長谷釜	女	避難所		
17	寺島	男	学校→知人宅	借家	

事例は決して多くないので、結論として述べることはできないが、借り上げ住宅利用者は、仮設住宅利用者と異なり、1000時間以内に親類等の補助を受け、借り上げ住宅を利用している。このことは、選択的に借り上げに至ったのではなく、たまたま、親類の援助など社会資源が利用できたために、借り上げ住宅に入居したのであると考えられる。



(発災後 1000 時間以内)

図 2 借り上げ入居者の資源利用

(考察)

岩沼市のように地域の結びつきが強いところでは、社会資源がどのように生かされるのかは、一律には決定できないが、比較的早期に家族や親類からの援助があり、仮設住宅に強いて入る理由がない場合には借り上げ利用が生じると考えられる。それに加えて家族が病気であったりした場合には借り上げに移る可能性が強い。ただし、岩沼市の場合は、借り上げに移ったからといって、社会的自立がより早いわけでもない。また、集団移転が必ずしもいいわけではないが、借り上げ住宅から復興公営住宅に移った方が、他地域に比べて多かったことは、行政やその地区の方の働きかけが功を奏したと考えられる。

岩沼市のように避難所の運営がうまくいった所とは異なったり、仮設住宅の建設が遅れた(岩沼市は仮設に使える土地があった)場合には、借り上げ住宅の制度は有効であると考えられる。

(文献)

東日本大震災 2012 年あの時、岩沼では 国井書房

復興の教科書ホームページ www.fukko.org

井口経明 2015 年 千年希望の丘物語 プレスアート

立木茂雄 2016 年 災害と復興の社会学 萌書房